

(四)

刃傷は江戸城中にて出来しゅつたいしたれども、其の發端の一といふべき「傳奏屋敷疊替へ」の件くだり、すなはち人口に膾炙す。

「傳奏屋敷」とは何ぞや。

抑そも朝廷と幕府の詮議は、朝廷より「武家傳送」、幕府より「京都所司代」出で、面談して折衝に當る。京都所司代の方、位階高きが常。これによりて幕府、朝廷を威壓せむとす。武家傳奏江戸下向の折には「傳奏屋敷」に滞在す。

因みに「京都所司代」は長官も「京都所司代」、其の京なる衙門がもんも「京都所司代」と指稱す。さは二條城の北にありき。

傳奏屋敷は和田倉門外辰ノ口にあり（現在・皇居外苑和田倉噴水公園／従前は吉良屋敷にて上野介誕生の地）、敕使院使在府江戸滞在中の折には、武家傳奏にはあらねども、之に準じて傳奏屋敷に寄宿するが常なりき。

饗應役の浅野内匠頭の上屋敷は築地本願寺に近き鐵砲洲にありて、如今の聖路加看護大學なれど、饗應の御役目終ふるまではとて傳奏屋敷に詰めてありき。

忠臣藏の「疊替へ」とは、敕使奉迎の爲に疊を悉く新調すべしや否やの儀なり。浅野より吉良に「疊替への要ありや」と照會したるに「其の要なし」との理握りあくを得たり。然しか而かりしかうして、さは浅野を陥れむが爲の虚言にて、疊さながら改めざらむか、浅野の面目立ち難かりし正念場なりし。やうやくにして氣付きたる浅野方にては夜を徹して此れを完遂せりとぞ傳へらるる。

然れども、此かくの如きは講談たぐひの類の嘘八百といふべし。

(五)

吉良の眞に浅野を愚弄したりしや否やに就ては、三百載不決の議といふべし。

浅野に粗忽の儀あらむか、「饗應差添役」たる吉良またその責せめを免れざらむ。浅野を苦しめむとて苛酷の仕打ちに出づれば、我が身の咎となりて跳ね返らではあるまじ。

雖しか然かりしかうして、姑根性もてちびちびと苛さいみたる擧句に、老中に向ひて、「浅野は御奉公叶はじ」と誣陷ふかんし、且は浅野臨席のをりにも忌憚きたん無之レさは言ひたりぞと傳へらるる。

假令たとひ浅野心身を病みたりとの事實あらむとも、吉良また怨恨の種を撒きたるに相違なからむ。

(六)

斯の如くにして、播州赤穂浅野内匠頭長矩、五萬三千石の城を棄て、家を棄て、家來を棄て、我が命も捨てて刃傷にぞ及びける。

所は江戸城内、松の廊下。

時代劇にては、襖に常盤松の巨木一本描かるるが常なれど、さは後世歌舞伎の舞臺を飾らむが爲に出で來れるに過ぎず。寔は小さき松の澤(sumi)に生ふる圖柄なりしとの由。

内匠頭、上野介の前額(ひたひ)に切り付けたれども、烏帽子の金具に當りて深手を負はするに至らず。今一度打ち掛かりしは背にして、これまた浅手。

かくすればかくなりて、浅野は士道不覺悟と難ぜらる。用ゐたる刀は「小さ刀(ちひがたな)」。江戸城中にては、佩刀許されざればなり。小さ刀もて仕留めむとすれば、切るにはあらで刺すが武藝。思ひ至らざりし浅野、花は櫻木人は武士の心得に闕(か)くる所ありと末代に恥辱を遺す。

切りつけたる浅野を背後より抱きとめたるが、梶川與惣兵衛(よそびやうゑ)。屈強の巨漢なれば抗ふを得ず。

(七)

浅野は駕籠にて田村右京太夫の屋敷に拘引せられ、かしこに控へさせられたり。新橋驛より徒歩にていかほども隔たらず。

時移さずして、上使來りて切腹の沙汰下る。

老中若年寄悉く拙速を避けて暫し吟味あるべしと言上ありしに、將軍逆鱗鎮らず、即刻處斷すべしと上意苛烈を極む。

をりしも正二位内大臣徳川綱吉、生母桂昌院に位階を下されたく朝廷に奏請してありき。敕使下向の砌、かかる不祥事ありては己が孝心邯鄲(かんたん)の夢とこそは消えなめと憂ふるの餘りに忿懣(ふんち)如何ともするなかりき。

然則、綱吉母の官位の顛末いかなりけむ。案するなかれ、女性の極位(きよくゐ)從一位に敘せらるるを得たり。

(八)

上使叩扉(knock on the door)して、自裁を命ぜらるるや、内匠頭平伏して萬謝の辭をぞ上つる。

その意は、此罪磔(はりつけ)獄門に處せられむとも抗辯なかるべきに、屠腹(とふく)なる榮(えい)に浴せしめ給へる柳營(りゅうぎやう)の優詎(えんし)に謝し奉るとの義なり。

既に、切腹仰せ附けられたる砌、禮辭は定式ありき。

今日、不調法の儀、如何様にも仰せ付けらるべき儀を、切腹仰せ付けられ、有り難き仕合せに存じ奉り候。

辰の口の噴水に四十七士を思ふ

みもとせそし
三百歳 誇りな給ひそな 嗤ひそ 褒むるも空し 噴き上ぐる水
しづき
千代田の原霧雨紛ふ 沫かな和田倉門外忠魂の泉

（令和七年八月十五日受附）